平成１６年度英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」　　番号 16044

研究テーマ：話す力を伸ばす指導の工夫

所属　夜須町立夜須中学校
氏名　南　佐代
ＲＧ　ＪＨ６

１．研究の背景

対象とするクラスは１年生から担当している３年生（33 名）である。全体的に落ち着いた態度で授業に臨み、発表も多い。ＡＬＴとの授業にも興味を持っており、全体の仲も良いのでペアや班の活動も仕組みやすく、教え合いもできる。英語をわかりたい、話せるようになりたいという気持ちを持っている生徒は多いが、表現することは苦手であり、単語テストやプリント学習などで付けた力が生かされていない。また、どちらかといえば控えめな生徒も多く、間違いを恐れてスピークアウトできないことがある。ただ、自分自身の授業を振り返ると、表現力を付けたいにもかかわらず、一つ一つの活動が表現力を付けることに結びついていなかったり、どれだけそれにむけた手だてを取ってきたかというと反省せざるを得ない。今回の研究では、特に話すことに重点を置き、間違いを恐れず自信を持って英語で話そうとする態度の育成と、既習表現を定着させながら英語を話すことに慣れるように指導を工夫していきたい。

２．リサーチ・クエスチョン

話す力（会話の継続、応答など）を付けるためには、どのように指導すればよいか。

３

①授業観察の結果

・パターンプラクティスのペア活動や、ゲームで英語を使うことには意欲的であり、あらかじめ準備している英文を口にすることはほとんどの生徒が抵抗なくできている。
・とっさに英語で応答する場合や、自由度の増した自己表現活動では、応用ができなかったり、何人かは簡単な英語でもどう表現していいかわからなくなりあきらめてしまっている。
・日本語で難しく考えてしまい、既習の表現で言い（書き）かえることができるのに気づかない。または、その表現を忘れている。

②生徒の英語学習の意識調査（５月）からわかったこと

・得意(好き）な活動として「音読」「書くこと」をあげている生徒が多い。「書くこと」は単語テストなどで点数に結びつきやすいこと、性格的に静の活動を好む女子の生徒が多いからと思われる。
・苦手な活動として「話すこと」「自己表現」をあげている生徒が多く、とっさに答えられないもどかしさや、どう言っていいのか全くわからないといったことを感じているのではないか。
・今後の目標として多数の生徒が「英語を話せるようになりたい」としており、インタビューテストの継続を要望する声も多かった。また、入試対策や復習、プリント学習を増やしてほしいといった要望もあり、受験に向けて基本を徹底したいことがわかった。

③英語力を示すデータ（教研式ＣＲＴ）

・各観点、領域とも全国得点率を上回っており、「書くこと」は特に得点率が高い。理由としては、マークシートであった点もあると思うが、単語テストを重ね正しく書ける生徒が多くなったこと、主語＋動詞の英語の語順が少しづつ定着していることなどが考えられる。この力をいかに実践的に話す力へと持っていけるかが課題である。

４．仮説の設定

仮説１　毎時間５分程度の会話の口頭練習をすれば、英語を口にすることに慣れ、会話の基礎力を付けることができるのではないか。

仮説２　「つなぎ言葉」や「相づちの表現」を学べば、会話の継続ができるようになるのではないか。

仮説３　答えにプラス１文で感想や説明を加えたり、相手の答えに対し質問する力を付ければ、会話を継続させ、会話の幅も広がるのではないか。

仮説４　仮説１～３の発展として、一つのトピックについてマッピングシートを作り会話に臨めば、会話を継続させ、話す実践力が付くのではないか。

仮説５　仮説１～３の発展としてスキットを行えば、原稿作りと演じることによって色々な表現を学び、定着させることができるのではないか。

５．計画の実践

仮説１　毎回とはいかなかったが、授業始めに５分程度 Q&A シートを使ってペアで会話練習を行った。プリントには現在学習中の言語材料と既習の言語材料の質問と答え方の例を載せ、実際に使えることを目指した内容になるよう心がけた。２学期は日本語で状況を設定し、自分で英語の質問を考える項目も作り会話練習を行った。

仮説２　仮説１の Q&A シートの練習のなかで、「つなぎ言葉」や「相づちの表現」を教え、会話を継続させるようにした。Well...などの言葉なしに５秒以上沈黙すればその質問には答えられなかったこととする５秒ルールを設定したり、使った表現を挙げ、評価につなげることで会話の継続を意識させた。

仮説３　仮説１の Q&A シートの練習のなかで、答えに感想や説明のプラス１文を加えることを意識させた。自己表現活動（書く）でも１つのトピックに対し、できるだけ詳しい説明や感想を加えていき、前後のつながり、内容重視の指導、評価を行い、話す活動につなげるようにした。インタビューテストや定期テストの自己表現問題では、答えにプラス１文があることを評価規準の一つとして設定した。
相手の答えに対して質問する力を付ける実践は具体的には行えなかった。

仮説４　仮説１～３の発展型にと考えていたが、仮説５のスキットがメインとなったことと、自由会話で、より高度となるこの形を実践するには至らなかった。

仮説５　新しい言語材料を使うことを条件に入れ、スキットの原稿を作り、発表した。初めはモデルを自由に表現させた。２学期は、日本語にこだわりすぎないこと、質問があれば既習表現で言い替えられないかヒントを個々に与え、考えさせるように指導した。

６．実践の結果

Q&A では同じ質問を２週間程度続けたが、毎回パートナーを変えたので楽しみながら活動を行うことができ、英語を口にすることはかなり慣れ、繰り返すことで既習事項の定着が以前より高まったと思われる。プラス１文することを評価規準として明確に伝えたことで、意識して活動するようになった。しかしながら、同じ表現ばかりになったり、内容に物足りなさが残る生徒が多かった。スキットでは、１学期はスキットを長く作ることのみを目標としていたが、２学期は他のペアの発表に刺激され、より楽しい内容、より英語らしく発表すること、演じることを生徒が自然と目標にしていくようになり、意欲的に取り組むことができた。文法の復習、演じることによる表現の定着とスキットは有効であった。また、日本語にこだわりすぎず、既習表現で言い替えを考えることを意識させることについては、英語の得意な生徒には有効であったが、全体では今後まだまだ指導の継続と工夫が必要である。

生徒のアンケートより

英語を使って話すことをどう思うか	楽しい	難しいが楽しい	難しい	好きでない
（７月）	８人	１３人	５人	３人
〃　（１２月）	６人	１９人	８人	０人
英語を話す力は付いてきているか	は　い	どちらともいえない		いいえ
〃　（７月）	２４人	４人		１人
〃	は い	どちらかといえば、はい	どちらかといえば、いいえ	いいえ
（１２月）	１５人	１６人	０人	１人
英語を口にすることに慣れたか（１２月）	１０人	１９人	２人	１人
Q&A は役に立っているか　（１２月）	１９人	１１人	２人	０人
スキットは役に立っているか　（１２月）	１６人	１５人	１人	０人

７．結果の検証

５月の予備調査では「話すこと」を苦手としている生徒が１８人（５６％）いたが、現時点では楽しいと感じている生徒が増えており、この取組はある程度効果的であったと思う。特にスキットに対して「色々な表現が使える、覚えられる」「楽しいので自分の書いたこと、言ったことが覚えられる」「新しい表現に出会える」「自分で考えるから力が付く」今までに習った文法も使うので復習になる」という意見が多く活動への満足度は高い。英語を口にすることに慣れるという点では基本的な会話や繰り返しの練習によって、ほぼ全員が自信を付けることができた。それは、ALT のインタビューテストへの取組や評価からもうかがえ、学習全体への意欲につながった。しかし、当初のテーマ「話す力を伸ばす」をどこまで達成できたかは、仮説４のようなフリートーク的な実践に至らなかったので、現時点では検証し切れていないというのが本当のところであり残念である。

８．成果と今後の課題

あまりにも小さな取組と、スモールステップの仮説ではあったが、継続によって「話すこと」(英語を口にすること）に対する生徒の自信と意識変化をもたらせたことは成果である。日本語をそのまま訳そうとせず、既習表現に置き換えようと考える生徒も出始め、今まで一問一答形式だった私の授業に、考えるという要素が少し入ってきた。生徒の様子からも考えることの大切さを今更ながら感じている。今後は、実践的な話す力を付けるためにスキットの継続、マッピングを用いたフリートークに取り組みたい。また、限られた時間での効果的な授業、４技能がリンクし相乗して力をつけていくためにはどうすればいいのか理論の学習も積む必要がある。